

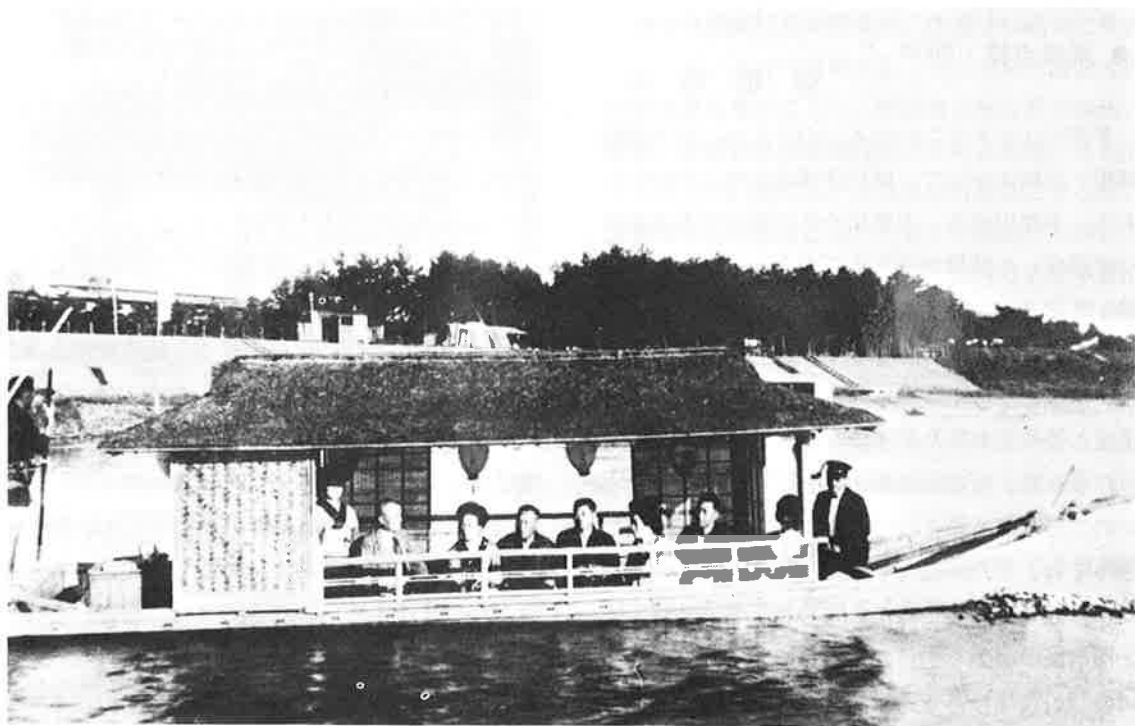
財団たより

多摩川

1980. 6. 第6号



オランダガラシ



舟遊び(大正末期)

■ 川のはなし ■

⑥ 「夢想家の日」

多摩川是政の河原に、私を惹きつける一家があった。始めは某工場で仕事するつもりで、栃木県から東京府下へ移ってきたのだそうだが、一ヵ月ばかりで思いがけずその工場がつぶれると、この一家はへこたれずに、河原の砂地に家をつかった。それから十年、とうとう初志をつらぬいて、今では八百羽の鶏を飼いながら、立派に多くの子供を学校へ通わせているのである。ニセアカシヤの倭木しかない砂地で暮しているこの家族の生活も、私には一つの微笑ましい見本であった。その砂地にタンポポがいちめんに咲いたから、遊びに来いと、その家の小学二年生がハガキをくれたりすると、私はその一家に対する、おさえがたい親しさを覚えるのであった。またそのあたりの荒地のさまも、この一家があるが故に活気を帯びて私をひきつけるのであった。

が、多摩川の中流地、福生町にいささかの縁故があって、そのあたりでいよいよ土地を探し始めたのは昭和十八年の夏

であった。

私の借りたいと望んだ土地は、多摩川の河原と、玉川上水とに挟まれた、細長い雑木林の丘陵で、もしもそこに住めるようになれば、庭地の傾斜がそのまま石の河原につながる場所であった。河原へ傾斜した丘には何本かの亭々たる樅の木がそびえ、眼下に眺め下ろす多摩川の対岸の大きい丘陵の両端には、上流は武甲山から奥武蔵の丘陵、下流は丹沢の山嶽が望まれた。

河原の草地では山羊が飼えようし、果樹や竹林も植えられよう。木を掘り起し、石を運んで、わが手でいろいろやってみるのも楽しいことだと私は思った。町に属してはいるが、町のはずれで、人けのない所だから、心静かに何でもやれようかと思った。かくべつ「農村」に住みたいのではない。「自然」の中に家を持ちたかったのである。

(『文学にみる日本の川』「多摩川」、海井孝作著 日本通信社より 中西悟堂)



● 流域点描・関戸

曾根伸典

多摩ニュータウンへの入口のひとつ、京王線聖蹟桜ヶ丘駅はかつて、関戸停車場と呼んだ時代がある。多摩川水系・大栗川やその支川である乞田川が形成した沖積地であるこのあたりは、悲歌を残して旅立った防人が、あるいは法師が、商人がまたあるときは甲冑を鳴らして武者団が通った中世、東国に中心が移った政治の動脈である、鎌倉街道の要所であった。多摩ニュータウン計画の進行に合わせて、現在の大栗川と乞田川はニュータウンの主要な排水路として改修され、また乞田川に添っては、甲州街道とニュータウンを結ぶ幹線道路が敷設された。そのために今は、鎌倉古道も、乞田の谷の面影もすっかり薄れてしまったが、乞田の谷の左岸にある熊野神社は、関戸の地名のもとである鎌倉街道の関、「霞の関」の跡であると伝えられている。

大栗川合流点から乞田川に添っての帯はまた、貴重な植物の多く自生している所として、植物研究者たちに広く知られた所でもあった。多摩川は「関戸の渡し」があって、渡しの先に続く水田と丘陵の接する山脚の部分には、ワニグチソウやラショウモンカズラ、ヤマトリカブト、カタクリなどの自生地が散在し、丘陵の斜面をのぼる小径に添っては、ヒカゲノカズラやシシガシラ、ツチアケビ、さらにはこの地域に特記されるシロバナショウジョウバカマなどが観察されたことは、丸山尚敏氏の著書「野に咲く花Ⅰ・Ⅱ」（山と溪谷社刊）の中にも、思い出深く描かれている。造成さ

れる以前の岩の入沢と呼ぶ乞田の谷戸の奥には、滲出水でひたされた湿地にハンノキ林があって、林床にはノハナショウブやサワギキョウ、オオニガナ、といった氷期残存植物と呼ばれる植物群、モウセンゴケ、サギソウ、トキソウ、オオミズトンボといった植物たちが、四季のうつろいの中に生活環をくりかえしていた。シロバナショウジョウバカマは筆者が、1972年に大栗川合流点附近の斜面に唯一株を発見採取したのを最後に、以後、その姿を見ることができない。この採取した一株は今も、某野草研究家のもとで増殖が続けられており再び野に戻す日を待っている。もともと、安心して関戸の地に戻せる所を得ることが先決であることはいうまでもない。できるならば移植したこのシロバナショウジョウバカマが、野生に近い状態のままに永続できる場であって欲しいものである。

今年の春、友人に誘われるままに、乞田の谷に鎌倉古道の面影を追って見た。しかし、早春の萌えあがる息吹きをこの地に期待するには、乞田はあまりに変わりすぎていた。丘陵は削られ、谷戸は埋まり、緑衣を剥がれた火山灰土は濁き、白さが眼立つ建物と高く積まれた擁壁、そして河床まで固められた水路ばかりが目立っていた。ほこりを含んだ乾いた風が、中古車展示物ののぼり旗を吹き鳴らすばかりであった。分譲住宅地の裏手に残された樹林の中に、中腹からしみ出す地下水のほとりでは、このわずかな水量にしがみ付くごとく残っていたカタクリとヤマトリカブトの小群を記録することができたのは、せめてもの救いというべきかもしれない。（財）日本植物友の会参与

多摩川と私



つり風景（明治40年頃）

● 多摩川の鮎と私

梶川 謙三

多摩川の明治から大正、昭和にかけての思い出に限りない郷愁を覚えるままに——

明治・大正の遊漁は餌釣り、蚊針釣り（ドブ釣り、浮き釣り）で、子供たちの眼鏡突き、引括りが全盛期の時代であった。

鮎が豊富であったこともあるが、遊漁者でも鮎を商売とする「ソクザイシ」が居て、この人達は管傘に手甲、脚半、草履をはいた独特な装いの人達で、6月下旬から8、9月にかけて淵を漁場とし、大形鮎を引き掛ける漁を専門にしていた。一日の漁獲は40匁から7、80匁ものを4、5尾掛ければその日の日当になるので、漁に限度をもっていった。府中の料理屋や旅館などの売り先の必要量に併せて限度を守っていたものである。

一般の鮎釣りは、篠竿に木綿糸の道糸に天ぐすを繋ぐが、この天ぐすは栗毛虫の腸を酢につけて引伸すと6尺以上にもなった。釣り針だけは小間物屋で売っていて、瀬釣り針は3銭位、ドブ釣り針は8銭位はした。また、オモリは手製で、砥石に型を掘って鉛を流して造った。鮎釣りに行くに

は30銭から50銭は必要だった。また、ビクも味噌濾し笊、茄子もぎ笊などである。そして私たち父子の釣果は、3、4時間で、私が10尾、父は3、40尾ぐらいは釣れていた。

時おり投網打ちが来るが、漁場では絶対に竿先に入らず、さけて言葉を掛け合う漁民と遊漁者の交歓風景も常のことで、遊漁者は組合員の鵜飼い跳網、眼鏡釣り等操業時刻の日中と漁場には入漁しなかった。釣り人である沿岸町住民にとって、多摩川は心のよりどころであり、漁場での争いは起ったためしなかった。こうしたことが多摩川の釣り風景であったが、これも、多摩川の鮎が多かったからかも知れない。当時の釣り師は、川の中の鮎の匂いでその日の釣り場をきめるほどで、鮎の匂いの強さは、年老いた人達のなつかしい思い出であり、多摩川の鮎を価値づける語り草になっている。

大正12年の関東大震災後、多摩川は東京復興の砂利採取で大きく変貌する動機になった。しかし、昭和10年ごろまでは、二ヶ領用水堰下から上流が漁場で、6月1日の鮎解禁の日には打ち上げ花火があがり、徹夜組の遊漁者や投網を打つ組合員に知らせた。これを合図に、釣り師数百人が一番に竿を入れ始め、報道人の焚くフラッシュなどで釣り場は戦場化していった。

その後、戦災復興のための砂利採取や奥多摩湖の完成、飲み水の確保などで多摩川はみる間に変わっていく。それに伴って、多摩川の漁業権者も鮎を増殖し放流しなければならなくなり、すでに戦後から30年も続けられている。多摩川の漁業組合の一員として40年余微力ながら、せめて多摩川だけは、清流を保ち、市民のレクリエーションの場である事を願ってきたが、取水するにしろ、汚れた排水を流しこむにしろ、何れもそこは多摩川であることを心に銘記しておいてもらいたい。

（東京都内水面漁業協同組合連合会専務理事）

よみがえ

甦れ！多摩川

日野市は、昭和38年に市制がしかれた多摩地域の中でも比較的新しい都市である。他の多摩地域の都市と同様に、この都市も急激な人口増加によって生活環境が大きく変わろうとしている。そうした中で、今、日野市では市民と行政が一体となって、豊かな生活環境を創ろうと、着実な努力が続けられている。そして、その注目すべき対策のひとつに、市内の用水路や河川を対象とした「清流計画」がある。

市の北側を多摩川が流れ、市内の中心を横切るように浅川が流れている。そして、浅川の沖積低地は、農業用水路が網のようにめぐり、このあたりでは代表的な米作地帯でもあった。又、台地や丘陵地の産地からは、いたる所で湧水が発し、水に恵まれた土地である。ところが、こうした、日野の郷土景観とも言うべき水路網や丘陵の緑に囲まれた田園風景が徐々に消えだすのは、昭和30年代の後半からである。それとともに、浅川や用水路の水質が悪化しはじめ、かつての面影をなくしはじめた。こうした現状を目のあたりにした住民からの強い要望もあり、昭和50年に市は「清流条例」を定め、種々の対策に着手する。用水路の整備・しゅんせつ・清掃、各家庭に協力を求めて清流フィルターを設置・各用水路の年間通水・魚の放流などである。清流フィルターというのは、各家庭の台所排水の放流口の所に設置されるゴミ取り器の事であるがこうした対策が効を奏し、現在ではかなりの改善がなされ、きれいで豊かな水が水路を流れるようになった。今年度、市では、さらにこの清流化計画を進めるにあたって、用水組合と市民の協力による、清流監視指導員の制度を設けようとしている。これは、幹線用水38kmのうち1kmごとに指導員を委嘱し、用水の管理、指導の権限を与えて、清流の監視を行なおうとするものである。用水組合から13名、市民から25名の指導員がその監視にあたることになっている。

～まちに緑と清流を～ 日野市

昭和55年度の清流関係行事としては、

- 〈4月〉 用水路清掃
- 〈5月〉 用水路に稚魚を放流（約1万尾）
清流監視指導員を委嘱
- 〈6月〉 水路清流「標語」の募集
第1回清流監視指導員会議を開催
- 〈8月〉 水路清流「標語」の入選作発表
- 〈9月〉 第2回清流監視指導員会議を開催
- 〈10月〉 1日から10日までを「水路清流週間」とする
- 〈12月〉 第3回清流監視指導員会議を開催
- 〈1月〉 各用水清掃委託
- 〈3月〉 第4回清流監視指導員会議を開催

が挙げられる。さらに、水路の改修、市職員による水路巡回清掃を行なう予定となっている。

一方、地元の人に、「アサガワ」と呼ばれて親しまれていた浅川も、一時期より水質の回復がみられるようになったが、まだ、市民の水遊び場として利用できるまでには至ってない。しかし、市としては、市長の方針にもみられるように、「昔のように、川とのよいつきあいをめざす」ための対策が考えられている。すでに、市民が親しめる浅川づくりの計画が、市の都市計画、公園緑地の建設などと平行して進められようとしている。

多摩の各都市のベットタウン化は今さら言うに及ばないが、すでに都市化の波に押されて、急激に高密度化し、さまざまな問題をかかえて身動きのとれなくなった都市は多い。しかし、この日野市に見られるように、水と緑の都市づくりに着手し、より豊かな生活環境をつくろうとする努力は多くの点で見習う事が多い。多摩川や流域の自然あるいは、永い歴史によって形づくられた郷土の景観をできるだけ生かした街づくり、新しいふるさとづくりといったようなものが、こうした、自治体によって率先して行なわれるようになれば、多摩川に対する認識も大きく変わる事になるはずである。「清流計画」は何も日野市だけの問題ではない。他の多くの自治体にとっても必要な事である。

《多摩川およびその流域の環境問題に関する》 「調査・研究」募集

当財団は、昭和52年度から地域に密着した研究は一般の方々の中に優れた研究者がいるとの確信から募集をしております。

I. 助成対象研究

多摩川およびその流域の環境問題（自然科学を主としますが、人文・社会科学関係のある部分を含む）調査・研究。

II. 助成対象者

多摩川環境問題に関心があり、調査・研究の意欲のある方でしたら、学歴は問いません、今までは、学校の先生同志又は先生と生徒・児童のグループ研究が、最も多いケースですが、一般の住民の方々がグループを組んで研究されることも歓迎します。

III. 申込締切日

昭和55年7月10日。

本年度（昭和55年度）も研究者の募集をいたします。

IV. 過去の助成実績

年度別	研究助成件数			研究費総額 (円)
	新規	継続	計	
昭和52年度	6		6	1,984,900
昭和53年度	6	5	11	2,892,500
昭和54年度	7	5	12	3,381,490
計	19	10	29	8,258,890

希望者は、下記財団事務局へ連絡され所定の申請書をご提出下さい。

連絡先 〒150 渋谷区渋谷1-16-14(渋谷地下鉄ビル内)

財とうきゅう環境浄化財団

電話 (03) 400-9142

財団の事業紹介

〈多摩川'80の発刊〉

●総集編

全国的に河川敷の利用が進められていますが、多摩川'80では、この問題を取りあげ特集しました。多摩川においても、建設省によるマスタープランづくり、住民からの提案など河川敷利用に関する具体的な動きがでてきて関心が高まっている折から、今回は、こうした諸々の意見を整理し、紹介するという目的で編集しました。原稿をお願いした方々は、「多摩川河川環境管理計画」の策定に参画された西川喬氏、河川工学の宮村忠氏、

●資料編

資料編でも、総集編と同じテーマで、多摩川の河川敷利用に関する資料をあつめてみました。川砂利の採掘に関する資料、河川敷利用の変遷、利

造園学の進士五十八氏、住民団体から、多摩川の自然を守る会、以上の4者です。又、この問題をさらに広い観点から見つめようと、「親しめる川へ」と題し、建築評論家の川添登氏、造園学の田畑貞寿氏、地球化学の半谷高久氏、河川工学の高橋裕氏をお招きして、編集委員である加藤迪氏の司会で座談会を行ないました。さらに、現在までの多摩川の河川敷利用の経緯について編集班でまとめました。

用現況図、それに建設省による多摩川河川環境管理計画の概要の収録というような内容になっています。

多摩川シリーズは、年1回の発行で、すでに今回で6冊目になります。古い号は、何回か増冊し

ていますが、まだ余部がありますので、ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

《多摩川環境展》

今年も、環境週間にちなんで、第4回多摩川環境展を渋谷で開催します。

日時 昭和55年6月5日～11日
 場所 渋谷駅2階、東急百貨店東横店
 コンコース
 テーマ 甦れノ多摩川
 内容 〈川を甦らせようのコーナー〉

なぜ川は汚れるのか、川をきれいにするにはどうしたらよいかを、写真やイラストを使って紹介する。

〈個人による浄化対策のコーナー〉

家庭排水の浄化を個人の庭に設けた水路を使って試みている例や雨水を貯留して家庭での節水に努めている例を紹介する。

〈多摩川的环境浄化対策コーナー〉

多摩川的环境浄化に対する国、自治体、民間団体、住民の活動状況を、多摩川流域マップとともに写真・イラストなどをまじえながら紹介する。

〈財団のコーナー〉

昭和54年に作成した、多摩川

河川敷植生図(1/5000)を、凡例写真とともに展示する。又、財団の助成研究の成果、多摩川シリーズ等の発行物を展示する。

開場時間は、午前10時から午後6時までの予定です。質問その他は会場に係員がいますので遠慮なくお聞き下さい。

多数の御来場をお待ちしています。

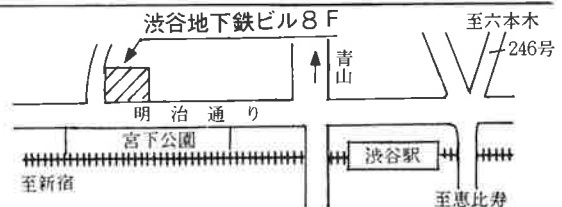


〈編集室だより〉

5月の声とともに、多摩川原の草原も、くすんだ緑から、濃緑の草原へと変わりつつあります。学校や住民団体による自然観察会もあちこちで開かれるようになり、多くの人が参加しています。川辺歩き、バードウォッチング、植物観察など、内容も豊富で

興味ある催しものです。何も知らなくても、詳しく説明してくれる指導員がいるような会もあります。時々、新聞の案内欄に紹介されていますが、一度ぜひ参加してみてください。春の多摩川はとて素晴らしい自然探索路になっています。

- 発行日 昭和55年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
 〒150 渋谷区渋谷1-16-14
 (渋谷地下鉄ビル内)
 TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
 TEL (0488)31-8125